

アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会 シリーズ講演会「日韓国交正常化 60 年を考える」

日 時：2026 年 1 月 23 日（金）

場 所：南山大学 G 棟 1 階 G28 教室

テーマ：シリーズ「日韓国交正常化 60 年を考える」

～文化交流の最前線で見た，感じた日韓関係～

報告者：加藤 剛（国際交流基金日本語試験センター企画調整チーム長）



本講演は，独立行政法人国際交流基金ソウル日本文化センターに赴任した経験をもつ加藤剛氏が，日韓交流の現状を踏まえつつ，自身が日韓文化交流に従事した経験を共有し，聴講者の韓国に対する理解および関心の向上を促進しようとするものであった。講演内容は以下のとおりである。

国際交流基金は 1972 年に設立された外務省所管の独立行政法人で，世界各国を対象に日本文化紹介や人的交流を通じて日本と諸外国との相互理解促進や外交環境の整備を行う役割を担っている。日本文化紹介や人的交流の範囲は，映画，美術，翻訳・出版，人物交流，日本語教育，学術交流と広く，国際交流基金では「言語」「文化」「対話」の 3 つのカテゴリーに業務を整理している。加藤氏は国際交流基金の一員として 2019 年から韓国に赴任し，公的機関の立場から日本と韓国間の文化交流事業に従事した。

近年，日本を訪れる韓国人の数が急増していて，それと比べると少ないものの韓国を訪れる日本人の数も増えており，若い世代を中心にお互いの好感度が増している。

韓国人の訪日ブームを背景に、日本ではあまり知られていないが、日本映画（特にアニメ）、小説、マンガ、J-POP、日本料理など、韓国では日本文化の受容が定着している。また、教育機関等で日本語を学ぶ韓国人は 55 万人を数え、日本語教育も盛んである。特に日韓国交正常化 60 周年であった 2025 年には多くの交流事業が行われ、日韓関係を盛り上げる役割を果たした。

国際交流基金ソウル日本文化センターは韓国の日本文化開放が始まって日韓関係が良好になった 2001 年に開設され、日韓交流の様々なアクターと協力して国際交流基金の対韓国窓口の役割を今日まで担っている。加藤氏が赴任した 2019 年は日韓関係が悪化し中止となった事業もあったが、そのようなときであるからこそ、これまでに築き上げた両国間の人的つながりが両国関係にとって重要な資産であることを実感することとなった。文化・芸術関係者、日本語教師、日本研究者をはじめとして、韓国には日韓関係を支える人材・機関が豊富にあることから、ソウル日本文化センターはそれらの人材・機関と協力して、様々な文化交流事業を展開することができた。

韓国で文化交流を行うにあたり、韓国社会の柔軟さ、融通の利く面には助けられたことが多かった。また、韓国社会はいざというときの仕事のスピードが速く、驚かされた。日本と韓国は時差がなく移動に時間もかからないことが交流にとってはとても有利である。そしてなにより、上述のとおり日本に関心のある韓国人が多いことは交流のハードルを下げてくれた。

いっぽうで日韓間には歴史認識問題や領土問題といったセンシティブな問題が存在し、本来はそうした問題を一緒に協力して管理していくべきであるが、扱い方によっては片方の社会、あるいは両方の社会から批判を受けるリスクがある。またそうした問題が社会問題化した際には、2019 年の関係悪化のように文化交流においても事業の中止等の影響を受けることがある。そして、先ほどは韓国社会の仕事の速さを利点として挙げたが、特に国際交流基金のような公的機関は決裁に時間がかかる等、韓国のスピードについていけないことが多々発生している。また、上述のとおり日本文化受容が商業的にかなり浸透している中で公的機関としてどのような交流を行うべきか、その役割の難しさを感じるがあった。

日韓交流の象徴的な先達として、日韓関係に貢献した日本人、韓国人をそれぞれ紹介する。日本人の浅川伯教・巧兄弟は、日本統治時代に朝鮮の文化の価値を見出し、日本に紹介した人物で、特に弟・巧氏は朝鮮語を学び、朝鮮の風俗・文化を愛し、若くして亡くなったあともソウルにある墓地に眠っており、そのお墓は韓国人によって守られ、毎年命日には追悼式が行われている。

将来にわたって語り継ぎたい韓国人は李秀賢（イ・スヒョン）氏とそこそ両親である。李秀賢氏は日本に留学していた 2001 年に線路に落ちた日本人を助けようとして自らも犠牲になってしまったが、彼の崇高な犠牲精神は当時日本中に感動を与え、今

も命日には追悼式が行われている。彼のご両親はその後、日本中から寄せられた見舞金、弔慰金でアジアから日本に来る留学生向けの奨学金を開設されるとともに、日韓の架け橋になるはずであった李秀賢さんの遺志を継いで日韓交流に積極的に参加されている。残念ながらお父様は亡くなられたが、ご両親の日韓友好への思い、行動力は尊敬に値する。

最後に、日韓関係のよりよい未来のために、「ともに未来を創ろう」と呼びかけた。今回の講演ではあまり触れられなかったが、日本と韓国は、地域格差、少子高齢化、社会のセーフティネットの問題、さらにグローバルには大気汚染、海洋汚染、北朝鮮問題など、共有の課題を抱えている。激動する国際社会のなかで、日韓で協力できること、協力しなければならないことは多い。今や共通の文化を消費して親しみをを感じるようになった両国ではすでに様々な交流プログラムが行われているが、単に交流だけではなく、共通課題を一緒に解決するような、より強い絆で協力する場面が今後増えていくことを期待する。

(文責：加藤 剛，星野 昌裕)